様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４５０７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７８０３３１

研究課題名（和文）災害復興支援活動に関わる若者の役割と可能性に関する考察～二つの大震災の経験から～

研究課題名（英文）A Study of the Role and the Possibility for the Youth Concerened with the Disaster Reconstruction -between the Great Hanshin Awaji Earthquake and the Great East Japan Earthquake-

研究代表者
高橋　真央（TAKAHASHI, Mao）

甲南女子大学・文学部・准教授

研究者番号：５０４０１６０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：今回の研究課題では、阪神淡路大震災と東日本大震災の二つの大震災で復興支援に関わってきた学生たちがその経験をどのように受容し、社会に寄与できているのか、またその際の課題について解明する事であった。東日本大震災の復興支援活動に関わった学生たちの復興支援活動の可能性について見出されたこととしては、「直接的な支援」活動と共に、「間接的な支援」活動が新たに拡がってきていることが分かった。阪神淡路大震災当時から比較すれば、経済的、社会的な環境は変化してきている。
「被災地に寄り添い続ける」という目的は双方の若者の復興支援活動の根底にあるが、その活動の内容については多様化してきていることが分かった。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I would like to clarify how students involved in reconstruction assistance by the Great East Japan Earthquake could accept their experiences, contribute to society, and problems. I also focused on the people who experienced the reconstruction assistance by the Great Hanshin Awaji Earthquake because they were leaders or specialists for this assistance in Tohoku area since March 11, 2011.
Now I found “the study for the youth through the experiences of the volunteers in Tohoku area”. I would like to show these results as follows; 1. Learning from the stricken area, Tohoku area 2. Learning from the peer through the activities 3. Learning from the cooperation with other agencies; government, companies, NPOs etc. 4. Learning from the social contribution and participation 5. Learning from the geographical and historical background by Great Hanshin Awaji Earthquake.

研究分野：ボランティア論

キーワード：ボランティア　東日本大震災　阪神淡路大震災　学生　復興支援活動

１．研究開始当初の背景

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災では、未曽有の被害を生み、日本社会が悲しみの中にあった。

同時に、「災害ボランティア」として被災地に出かける人々が発災直後～1 年間は続出し、阪神淡路大震災を遥かに上回る大災害としてボランティア参加者数、各国からの支援、国内外からの募金も並外れた金額となった。

しかしながら､震災から 3 年が経つ頃には、災害ボランティアの勢いも弱まり、発災直後の被災地へ外部者が駆けつけて支援活動を行っていた「活気」は消えつつあった。

大学では震災当時には学生のボランティア活動を積極的に支援する姿勢を見せたが、被災地の復興のフェーズが進むことによって学生ボランティアの支援体制も弱体化し、発災直後に生まれた学生ボランティア団体もなりを顰めるような状況となっていった。

その中でも、発災直後から被災地の現状に対応しながら、活動を続けている学生ボランティアもあった。それは発災直後の「瓦礫除去」などの力仕事ではなく、あまり変化が見えない、地元の人々との交流型の学生ボランティア活動はしっかりと地元に定着しながら進めていた。

このような背景から、東日本大震災時の学生（若者）ボランティアの活動の意義と課題について考える必要性があった。さらに、この学生ボランティアを様々な形で支援していたのは、阪神淡路大震災時に大学生として地元の復興支援活動に関わっていた若者であった。現在では、学生を指導する大学教員、研究者、NPO 職員などになっており、かつての学生ボランティアが経てきた失敗や課題を現学生達と活動を共にしながら進めている。

この現象に着目し、災害復興支援活動に関わる若者の役割と可能性に関する研究を本科研費にて行うこととなった。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、日本の災害復興支援活動に関わる若者の参加と意識について二つの大災害（阪神淡路大震災：1995 および東日本大震災：2011）から明らかにし、本分野の人材育成の課題と若者の復興支援活動の役割に関する多様な可能性について検討する事である。

本研究で計画している具体的な対象は、①阪神淡路大震災（1995 年）でボランティア活動に参加した学生、若者　②阪神淡路大震災を機に現在東日本大震災などの社会貢献活動に寄与している人々　③現在東日本大震災等の復興支援活動に関わる学生である。若者の「災害復興支援」をキーワードに、本研究を通して大災害後の若者たちの活動の可能性と課題を明示する。

（２）本研究では、二つの災害でボランティアや復興支援活動に携わった若者（主に大学生を対象）として、これらの活動を通して彼らの意識（復興、日本社会、将来への希望）がどのように変化したのかを見ていく。彼らの意識の変化には日本社会の社会的経済的変化が影響を及ぼしている。それらについてインタビューや資料調査、フィールドワーク等から分析を行う。

特に阪神淡路大震災で支援活動を行った当時の大学生は、20 年近くがたった現在、様々な立場で神戸や関西圏、また日本社会の「ボランティア」「まちづくり」「社会貢献」「災害救援」の活動を牽引している。申請者もこの世代にあてはまる。本研究では、阪神淡路大震災～東日本大震災～現在にかけての彼らの「災害救援」や「社会貢献」に関わる意識の変化などの分析を通して、次の世代である東日本大震災～現在～未来を担う若者たちの役割と支えるべきシステムについて課題提示を行う。

（３）東日本大震災では、多くの大学生がボランティアや寄付（募金）活動などに参加し、支援活動に関わる意識も高まっていた。しかしながら、震災直後～1 年間は、メディア等でも取り上げられ、大学生の意識も復興に向いていたが、歳月が経つにつれて、復興支援活動を行う大学生の数も減少し、意識も徐々に低下している。当初は足しげく東北に通っていた学生ボランティアも金銭的、時間的な災厄から訪問する人数も減っている。また、被災地では高齢化や過疎化に拍車がかかり原動力となる若者が極めて少なく、町の活性化が進んでいない。しかしながら、その中でも継続して復興支援活動に携わる学生団体もおり、被災地とのつながりは震災直後よりも強くなり、信頼関係も生まれ、両者の連携によるプロジェクト（支援活動を含む）も生まれてきている。

（４）今回は、東日本大震災の学生（若者）の復興支援ボランティアを中心として、学生ボランティアの課題、またそれをサポートする形で多様な場面で登場してきている阪神淡路大震災時の復興支援ボランティアとの関わりについても明示していく。

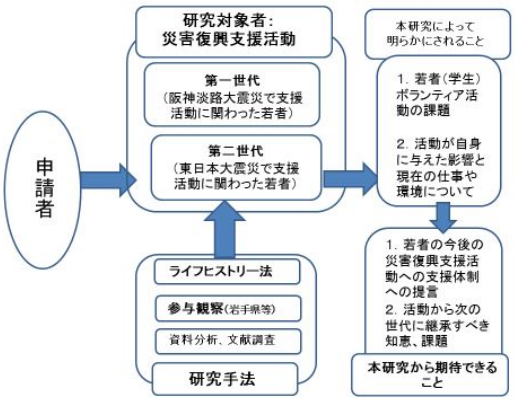
そして、今回の震災によって生まれた学生ボランティア活動のムーブメントの課題と可能性について考えていきたい。

３．研究の方法

（１）今回は、特にフィールドが神戸と被災地である岩手県釜石市、大槌町としているため、その地を中心として二つの震災を繋ぐ「ボランティア」の課題と可能性について考えていく。

調査方法、調査対象については、下記の図の通りである。

本研究の柱は、日本の災害復興支援活動における若者の参加と意識について二つの大災害から考察する事である。また、本研究結果を活かして、災害復興支援における今後の人材育成の課題と若者の役割に関する多様な可能性について検討する。

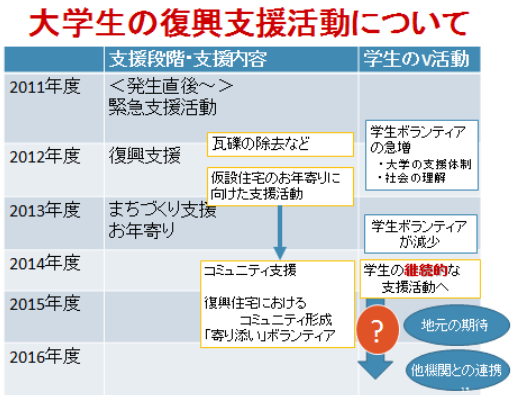


（2）本研究では、申請者自身が 1995 年当時に高校生として阪神淡路大震災を経験し、当地で活躍する学生ボランティアや復興支援に関わる NPO の活動に参加する大学生を見てきた。また、大学院生の頃には、「災害ボランティア」や「ボランティア」学を研究や活動を行っていた当時の若者と多く接点を持っていた。そのことから、申請者の当時のネットワークを使いながら調査を行った

また、申請者自身が大学生と共に、東日本大震災の復興支援活動（岩手県釜石市、大槌町を中心として）を 2011 年から現在にかけて継続して関わっている。関西の復興支援に携わる学生グループや NPO とも連携して活動を関西、被災地に行ってきた。このネットワークやフィールドを使い、申請者自身が時に活動の「当事者」となりながら、学生の参与観察を行い、本研究を進めた。

４．研究成果

（1） 活動のプロセスについて



被災地の復興支援活動は、復興のフェーズによってニーズが変わり、それに対応する形で計画される。そのため、学生が当初思い描いていた「災害ボランティア」のイメージでの「瓦礫除去」などは 2012 年頃には終了し、仮設住宅で孤立しているお年寄りのコミュニティ支援に変化していった。

また、2014 年度以降は復興住宅が徐々に建設されるようになってからは、コミュニティ支援のためのイベント企画運営に変化していった。同時に、震災から 3 年以上経ったころには東北以外の地域では、震災の記憶や支援の風化が起こってきており、被災地ではない地域での発信活動からの支援活動が求められてきた。「被災地を忘れない」という思いをベースにして、学生ボランティアたちが自分たちの多様な能力やツールを使って被災地以外での活動にも力を注ぐようになった。

（2） 復興支援活動を通しての「学び」について

① 被災地からの学び

2011 年 12 月から年に２～３回、被災地（岩手県釜石市、大槌町）に出かけて活動を行ってきた。その中で、学生たちが知ったことは、次の点であった。

・当時の現状を知る（津波の状況、被災の状況、防災）
・復興の状況を知る
・復興に関する課題を知る

➡町を歩き、コミュニティの人々（特にお年寄り）の話を聞くことを通して何が問題になっているのか、報道では触れられない（知ることのできない）、地元の生の声から課題を知る、感じること

学生たちは報道や SNS などによって情報は瞬時に入ってくるようになり、被災地でずっと生きている人々の息遣い、被災後の悲しみや痛み、そして復興に向けて格闘する強さや逞しさ、学生などのボランティアといった外部者を快く受け入れてくれる優しさを感じ取ることができた。何よりも「知っている」つもりであった自分を知り、何も分かっていなかった自分に被災地で出会うことで、自身の無力さを感じ取ることとなった。

そして、地元の人々とのふれあい

や被災地という現場に立つことによって、自然の魅力；海の美しさと脅威を感じることができた。

このような経験を通して、「被災地の現実」を知らない身近な人々に知らせる責任、そして被災地で逞しく生きる人々と関わっていきたいという強い思いが垣間見えるようになった。

この学生の様々な変化は、被災地の現場から教え、導かれることによるものであった。後述するが、学生たちが「復興支援ボランティア」として気負いながら、被災地に出かけて行ったものの、自身の無力さという壁を前にしたことから見えたこと、さらに自分自身の存在、関わり方について自答することとなったことは被災地からの大きな学びとなったと言えるであろう。

② ピア」（同世代）からの学び

東日本大震災の復興支援をきっかけとして、今まで繋がりが全くなかったような他大学の学生や若者がセミナー等の集まりで会することが多くなった。それにより、復興支援という同じ目的で集まる学生たちには、下記のようなトピックでまとめることができる。

・同じ地域（神戸）から同じ被災地（釜石・大槌）を支援している若者として（図１）

➡ 異なる視点（専門分野）で同じ被災地を訪れる

・同じ地域（神戸）から異なる被災地（釜石市、気仙沼市、相馬市）を支援している若者として

➡ 異なる地域からの共通の課題を共有する

➡ 異なる地域を支援しながら地元で共同の活動をする

・異なる地域（神戸・東北）から異なる被災地を支援している若者として（図２）

➡ 互いの「期待」「思い」を交換する

➡「交わる」・・・若者としての迷い、やりがい、喜び

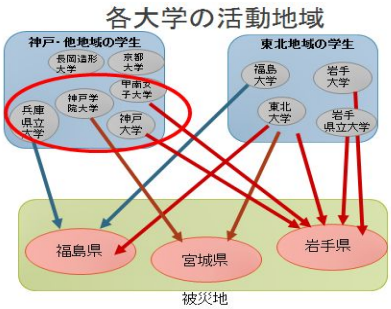


図１

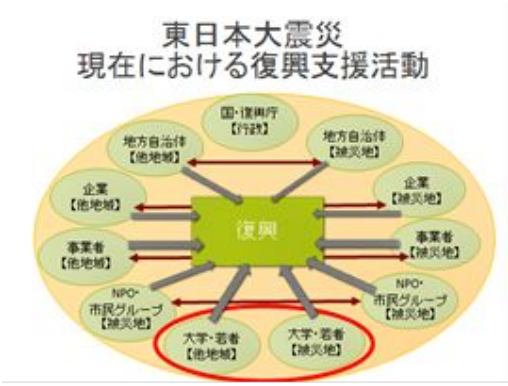


図２

③ 他機関との連携による学び

在関西の企業との連携による、発信活動が行われた。多くがイベントであったが、被災地の記憶を風化させないために、企業と学生たちが連携して発信活動を行った。

また、企業だけではなく、官庁（復興庁）や NPO などとも連携し、各組織の専門性について学生自身が学びながら、現在の復興支援活動の有り方について考えることとなった。

④ 社会貢献、社会参加に対する問い - 学び

「社会」に対する問いかけを行うこととなった。様々な機関や地域の人々と関わることによって、学生（若者）である自分自身ができることは何か？　という問いかけを行うと共に、「大学生」から「社会人」へと将来設計を行う過渡期にある学生たちが「社会構成員の一員」として考えるきっかけとなった。

また、「社会貢献に関する問い」として、「『ボランティア』への疑問」というものが出てきた。

学生自身が今行っている活動は、「ボランティアと言えるのか？」という疑問と葛藤が生まれてきた。学生たちの中に社会が考えている、もしくは自身が「あるべきもの」として捉えている「ボランティア活動」と今、携わっている活動に「ズレ」が生じている事への葛藤であった。

被災地に足繁く通うことによって生まれてきた多くの出会いと多様な物語、そして自身の被災地との関係性の変化が「ボランティア」活動として客観的に主張できるものではないことを意識するようになったことがある。

本項目の学生の「ボランティア」の意識の変化については、今後の研究として論文にまとめていきたいと考えている。

社会、市場での「ボランティア」

への期待と現場（被災地）での出会いから「ボランティアと言わない若者たちの出現」があり、これが現在の復興支援活動や他のボランティア活動の弊害になっている部分もあると考える。その点については、更なる研究課題として考えていきたい。

⑤ 学生が自ずと担ってしまった地理的背景からの学び（神戸から東北へ：阪神淡路大震災から東日本大震災へ）

学生が在籍する大学は神戸市内にあり、阪神淡路大震災で被災していた。また、教職員も震災で被災したり、支援の経験を持ち、当時の話を聞いたり、見たりすることも多くあった。さらに、東日本大震災の復興支援活動を通してつながったNPOの方々からも震災当時の話や今に続く問題点などについて話をしていただくことで「神戸に今いること」の意味を自ずと感じるようになった。

そこから、「かつての被災地、神戸で学ぶ学生として、東日本大震災の被災地に対して何ができるのか？」ということを考え、行動に移すようにもなった。

本項目についても後日論文にまとめて報告していく。

学生たちが震災後 20 年の追悼の式典に参加した際に残した記述として、「町の復興はしてきているが、心に残った悔しさや悲しさは何年たっても消えないと思った」「私たちは1995 年生まれで阪神淡路大震災を経験していません。そんな私たちにできることは・・・震災によって亡くなった方々や遺族の深い悲しみ、復興活動においての様々な人の思いなどに耳を傾け、『過去の出来事』として終わらせることがないように語り継ぐことだと思います」といった記述が多く見られた。また、大槌町出身で神戸の大学に在籍していた学生は、この式典の参加を通して、「これまで、被災地と言えば自然に東日本大震災を思い浮かべた。阪神淡路大震災 20 年の節目で足元の神戸が大槌とおなじ被災地だったということに初めて気づけた気がした（読売新聞　2015 年 1 月 18 日）」という感想を語っている。

このことから自身が震災の復興支援をしていくことの大切さを改めて感じ、復興支援活動の理念の前提を改めて感じ、行動するようになった。

さらに、復興支援活動に携わっている神戸のメンバーで毎年開催されている「こうべｉウォーク」に参加した際には、阪神淡路大震災時に復興支援活動やまちづくりに邁進されていた専門家の方々との交流をとおして、次世代を担う学生達との復興支援のバトンリレーが交わされるようなシンポジウムが行われた。

（3） 阪神淡路大震災世代と東日本大震災世代ボランティアの比較

阪神淡路大震災当時は、比較的大学（若者）が多い地域が被災したこともあり、学生自身が「当事者」意識を持って「継続的に」活動を行っていた。震災直後は全国からボランティアが駆けつけていたが、3 か月が経つと大学生たちは自発的にボランティアサークルなどの組織を作ったり、市民団体（のちの NPO）に関わったりしながら活動が続けられた。また、その頃に活発に活動していた学生たちが現在の社会起業家と呼ばれる草分け的存在となり、学生ボランティア団体を創設していくこととなった。また、現在では東日本大震災の復興支援のみならず、地域やグローバル社会の多様な課題について、学生を指導しながら活動を行う役割を担っている。

東日本大震災復興支援活動に携わった学生の活動や意識で大きく変化があったのは、活動内容に「発信」が重要な柱として位置づけられている事である。SNS が広まっている中で、簡単に情報が入手される時代にあって学生ならではの発信やネットワークの構築が見られた。被災地の活動を通して出会った若者や地元の人々と Facebook などを通じて情報交換をすると共に、活動を互いに励まし合う事も 3.11 以降の復興支援活動やネットワーク構築の変化であるといえるだろう。

阪神淡路大震災当時の学生と東日本大震災の学生たちの社会貢献やボランティアサポートに関する分析については、別途論文で詳述する。

二つの異なる震災ではあるが、先の震災で「学生ボランティア」の形を模索しながら築き上げた阪神淡路世代がおり、彼らの失敗やネットワーク、そして熱意に影響を受けて、東日本大震災世代の活動が現在ある。

「学生ボランティア」という一時のブームに終わることなく、震災後 6 年経った今も様々に形を変えながら、学生が地理的には非常に遠い地域の復興支援に携わっているのは、それぞれの指導者（阪神淡路大震災世代）の影響を日常的に感じているからだ

とインタビュー調査やフィールドワーク等から分かった。
本件については、学生インタビューから研究レポートという形でまとめていく。

（4） 学生「ボランティア」の可能性と課題

本研究では、東日本大震災の復興支援活動に申請者自らが当事者として学生と関わりながら、復興支援活動の学生ボランティアの意味について検討することとなった。
申請者自身も阪神淡路大震災世代として今の支援活動に携わる学生たちへの「バトン」リレーを行うという意識を持ちながら、研究対象者である学生たちに関わることとなった。
そのため、当初計画していたよりも東日本大震災の復興支援学生ボランティアに関わるボリュームがかなり多くなってしまったことはある。しかしながら、フィールドワークを通して、見えてきた学生ボランティアの可能性と課題については、今後に生かすことができると考える。
可能性と課題については、下記の3点がまず挙げられるだろう。

① 被災地での活動
（地元の人々と目標を共有する）
➡共有のプロジェクトが生まれる（現地、支援者：学生を含む）
➡新たな希望を共有する

② 大学教育の視点から
教育活動としての学生の「活動」をどう捉えるか？
➡自身の無力さと可能性を知る（Vulnerability の経験）
「寄り添う」ことの意味を知る
➡学生の主体性と被災地（地元の人々）との関係
➡継続性（何をどこまで続けるか？　ボランティアとしての限界と non-ボランティアとしての可能性に移行すること）

①については、震災直後からの大学ボランティアの記録や書籍で多く論じられてきた。しかしながら、震災後6年を超えた今だからこそ、継続して被災地に関わってきた学生や若者として考え、論じることができることもある。また、今だからこその可能性を述べることもできる。
② についても同様に、学生に寄り添った活動であるからこそ見えてきた点がある。本件についても、今後「復興支援活動における学生ボランティアの可能性と課題」というテーマのもと、ボランティア学研究等の中で論文としてまとめていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① 高橋真央、全ての子どもの健やかな成長のために‐私たちができること‐、ボランティア学研究第17号、査読無、2016、83-87

② 高橋真央、全ての子どもの健やかな成長をめざして‐国際ボランティアのフィールド活動‐、ボランティア学研究第17号、査読無、2016、79-82

③ 高橋真央、佐々木真規子、尹梨香、甲南女子大学における社会貢献活動-教員の社会貢献活動調査を通して‐、甲南女子大学研究紀要、51巻、査読無、2015、21-28

〔学会発表〕（計　3　件）

① 高橋真央、ボランティア学の20年を考える～これまでのボランティア学、これからのボランティア学にむけて～、国際ボランティア学会第18回大会、甲南女子大学、2017年2月18日

② 高橋真央、学生の社会参加から得た学びについて～5 年間の復興支援活動から考える～、国際ボランティア学会第17回大会、久留米大学、2016年2月26日

③ 高橋真央、大学の社会貢献と学生の社会参加における「学び」について、国際ボランティア学会第16回大会、京都女子大学、2015年2月28日

〔その他〕（計　1　件）
① 高橋真央、パネルディスカッション：女性の活躍が復興を加速する、復興庁・福島県男女共生センター主催、福島県男女共生センター、2014年12月13日

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　真央（TAKAHASHI，Mao）
甲南女子大学・文学部・准教授
研究者番号：50401609